

モダニズムの言説様式としての〈座談会〉

——「新潮合評会」から「文藝春秋」の「座談会」へ——

山 崎 義 光

一 はじめに

海外の雑誌にはあまり見かけられないが、日本の雑誌などではな
じみの記事スタイルに〈座談会〉という言説様式がある⁽¹⁾。この様式
は、明治時代に劇や短歌・俳句そして小説についての批評の様式の
一つ、合評⁽²⁾記事として現れる。『めざまし草』における、森鷗外、
幸田露伴、齋藤緑雨による匿名合評記事「三人冗語」がよく知られ
ているが、これは江戸期の「名物評判記の血脈の中に生じたもの」⁽²⁾
であることが指摘されている。こうした様式は明治三〇年前後に一
時の隆盛をみたのち、しだいに評判記の系譜的影響を離れながら、
劇評や短歌・俳句の合評会記録記事としてまずは定着をみる。「座
談会」という名称が定着したのは、『文藝春秋』が文芸雑誌から総
合雑誌へ移り変わっていく一九二七（昭二）年に、「座談会」が開始

されたのがきっかけである⁽³⁾。これに先だつて複数の評者たちによる
新作小説の合評を中心に、文壇や文芸に関わるテーマについての
〈座談会〉を筆録した記事を定着させていたのが「新潮」の「新潮
合評会」である。「新潮合評会」は、一九二三（大12）年三月号から
同年十一月号の第八回まで「創作合評」と題されて連載された。一
九二四（大13）年二月号の第九回から「新潮合評会」と名称が改め
られて定着し、一九三一（昭6）年四月号の第九十二回までこの名
称ではほぼ毎号掲載された。その後、座談会記事そのものは継続する
が名称から「合評」の語は消える。「新潮」で創作合評が連載され
始めるとすぐに、婦人雑誌等へ応用的に波及し、文学に限定されな
い一般的なテーマでも用いられるようになる。一九二七（昭二）年
三月から、『文藝春秋』における「座談会」記事が開始されて以降、
この形式は爆発的に普及する。

「新潮合評会」が連載された一九二三(大13)年から一九三二(昭6)年初めという期間は、大きな社会的事件との対応でいえば、およそ関東大震災から満州事変までの間である。この時期は、旧来の文学観に対する新しい文学観をもった、プロレタリア文学派と新感覺派・新興芸術派が対抗しつつ隆盛し退潮しはじめる時期である。一方では、大衆文学が隆盛した時期とも重なる。これらにはマス・メディアの拡大も要因としてはたっていた。大衆化が顕在化するなかで文芸と商業の関わりが深まり、また社会への働きかけ、社会の新風俗への興味が問題とされたことなど、文学の社会的基盤から題材としての社会まで、「文芸の社会化」が要請としても実際としても進行した時期として把握される。こうした社会全般の動向をここでは、広義の「モダニズム」の時代として理解しておきたい。従来、文学における「モダニズム」はプロレタリア文学に対立する潮流を指すことが多い。しかし、プロレタリア文学が社会に対する働きかけの志向を持ち、新感覺派・新興芸術派は斬新な手法と都市文化の表象を志向するなど、その志向に違いを持ちながらも、両者は旧来の文学観との切断を意識し、社会の変化に対する認識を鋭くもって、それぞれの方法を模索しながら近代性を積極的に推し進めた点では共通している。(5)「座談会」という言説様式がこの時期に定着し普及したことに注視するならば、大衆社会化が顕在化し、文壇においては多様な文学観が相克するなかで、新しい時代に見合った批

的執筆家による執筆の場限定される流れとしてとらえられる。

他誌にも目を向ければ、一九〇六(明39)年に創刊し、一般読者からの投稿を主とした雑誌であった「文章世界」が一九二〇(大9)年末に終刊する。変わって文壇人の執筆を主とすることで「文壇と交渉を持つ雑誌」(6)を目指した「新文学」が創刊される。一方、この頃から同人雑誌が多く現れる。浦西和彦は一九二〇年代の空前絶後の「同人雑誌の時代」を、それまでの「投書雑誌」から「同人雑誌」への移行として捉えている。(7)「文藝春秋」もまた同人雑誌として一九二三(大12)年に創刊されているが、しかし同人に閉じた編集ではなく、多数の文壇人の雑文的な記事を大量に集めた雑誌として展開し、一大商業雑誌へと発展する。これらを考え合わせるなら、同人雑誌の隆盛によって文壇の裾野が広がるとともに、商業誌の発行部数が増大していくこの時期には、専門的文筆家による上演と読者観衆という分化が生じ、いわば誌上の見せ物化、劇場化が生じて、メディア空間の自立化の傾向が強まったといえる。山本有三、菊池寛らによって、一九二二(大10)年に小説家協会の設立、一九二六(大15)年には文芸家協会が設立され、職業的文筆家の地盤がつくられたこともまたこの動きと連動したものであった。

文壇の裾野の拡大については、生田長江が「文壇の群衆」の増大として批判し、大宅壮一の「文壇ギルドの解体期」(「新潮」一九二六・十二)のような論説も現れるが、この時期には「文壇内大衆化」

評の言説様式として受け入れられたものと考えられる。

本稿では、「新潮」の合評会記事開始前後から、「文藝春秋」における座談会記事開始へと展開する過程の諸要因について論じ、「座談会」という言説様式の発生史の一面面を明らかにすることを通じて、この様式が果たした意義について考究する。

二 大正十一年の「新潮」記事編成の変容

一九二二(大10)年十二月号「新潮」の編集後記「記者便り」には、次のような記事編成の変更が告げられている。「時代の趨勢に鑑みるところあり、且つ次第に部数も増加してゆきますので、此際誌面に一大刷新を施して、さらに一段の飛躍をすることにいたしました。」「右の計画ですから、誌面も自ら変つてゆくのは当然であります。唯一つお詫びをして置かねばならないのは、これ迄の投書家諸君に対してであります。それは、この際断然、「自由論壇」並びに「短歌」欄を廃止することに決したのであります。」「新潮」の定番記事の一つであった投稿「短歌」欄を廃止し、さらに投稿記事として一度は企画され、記事の募集までされていた「自由論壇」欄を計画だけで廃止してしまい、読者の投稿欄をなくすとともに、それに変わって翌年の一九二二(大11)年からは、作家らによる「文芸時評」欄を設けた。さらにその翌年の一九二三(大12)年に、「創作合評」の創設にいたる。この流れは、素人読者が排除され、専門

の様相を呈する。

以下の論旨を先取りして言えば、メディア空間としての自立化、雑誌間の競合による差異化、文学をめぐる言論の拡散化を背景とし、記事のスタイルそのものを衆目を集める見せ物として提示しながら、文学にかかわる言説の求心力を確保する戦略の一つとして「座談会」形式の合評記事は機能した。そのように捉えるには、当時の雑誌間の競合と、言説の「雑文主義」的なモードを押さえておく必要がある。

三 雑誌出版の活況と競合のなかの「新潮」

「新潮」で「創作合評」が開始されたのは一九二三(大12)年三月であるが、「文藝春秋」が創刊されたのも、この年一月である。周知のように、大正十年代は、読者の大衆化促進による雑誌出版の活況と競合の時代である。浜崎廣によれば、この時期の創刊雑誌の数は「大正2年、3年は31、34誌だが、後期の大正14、15年になると135誌、137誌と急激に増加する。(昭5・2「東京堂月報」より) 総計にして875誌。内訳は1位が文芸誌、2位が社会・労働誌で1位と2位で全体の半数近く出たと思われる」という活況ぶりである。もとより、「1年以内に死亡した雑誌は31%にのぼる」。出版される雑誌が多いということは競合もまた激しい。浜崎は、そうした大正後期から顕著になり昭和四十年代末ごろまで続く雑誌競合の状

況を「対の時代」として扱っている。すなわち、一九二〇(大9)年に創刊された「主婦之友」と「婦人倶楽部」や、一九二二(大11)年に創刊された週刊誌「サンデー毎日」と「週刊朝日」の競合関係など、同系列の雑誌間で対の関係で対抗し競合するようになったという。必ずしも「対」で競合したときれいに整理はできないが、「新潮」や「文藝春秋」もこうした雑誌出版の活況と競合のなかで、その記事構成を変容させていたと見ることが出来る。

「文藝春秋」は、こうした雑誌出版の活況のなかで創刊され、その編集方針も他誌との差異化を意識したものであった。永峰重敏⁽¹¹⁾は、初期の「文藝春秋」の特徴を「モダン趣味の都市生活者のサロンの雑誌」と評し、次のように他誌との差異とその新しいスタイルについて述べている。記事はどれも簡単に読み切ることのできる短いもので、表現も談話調のくだけた内容の雑文を中心とし、軽やかさ・読みやすさを特徴とした「雑文主義」的な記事編成であった⁽¹²⁾。しかも、内容は過激で「俗習ただよう文壇意識と文壇臭」の充満した文壇ゴシップを満載したものであったが、こうしたゴシップ記事は「伝統的な文壇の権威への批判とそれによる権威のラディカルな相対化という効果をもたらした」。永峰は、このようなゴシップを中心とする雑文雑誌の読者階層について、次のように指摘している。「このような文壇ゴシップが有効性を発揮するためには、まず何よりも文壇や文学に関する基礎知識の共有が読み手の側に前提

ら、中村武羅夫氏の苦衷は察する。「合評会」はつまらないと

云つたが、自分で出ないときは面白い、自分で出たときは、内容を知り切つてゐるので、読んでつまらないのだらう。先づ止めなくてもいい、だらう。「不同調」は、ぜひ復活を希望する。

不同調でなくとも、それに代る社説的な記事でもい、。

この一文から「新潮」が大正十年代に他の雑誌群のなかでどのような位置づけにあったかがわかる。すなわち、一方に「中央公論」や「改造」といった総合雑誌があり、他方に「文藝春秋」「随筆」といった雑文中心の雑誌があつて、その中間に位置づけられている。そして、「復活を希望」されている「新潮」の「不同調」欄は、ちょうど「創作合評」が開始される直前の一九二三(大12)年一月で廃されていた。この欄を拡張して独立するようにして、一九二五(大14)年七月、中村武羅夫を発行兼編輯者とする雑誌「不同調」が創刊される。この雑誌もまた、短文の批評・エッセイを主体とし、雑談・ゴシップ・文壇内雑話などの雑駁な内容で構成されている。

こうした背景の中で開始された「創作合評」「新潮合評会」は、当時盛んであった新作の小説を批評する「月評」(時評)と同様の題材を、複数の評者による座談の筆録という言説様式にまとめ、文壇内雑話を上演してみせたのであった。それゆえ、雑誌間の競合という背景とともに、批評のスタイルとしての月評のマンネリ化とい

とされなければならない。すなわち、「文藝春秋」の文壇ゴシップを楽しんだり、教養主義の崇拜権を嘲笑したりするためには、教養主義自体にある程度通じた文学的教養階層に属する必要があるのである。ここでいう「文学的教養階層」とは、菊池寛や芥川龍之介のファン層からはじまって、サラリーマンや官吏・職業婦人等へと広がる「都市新中間層」の読者であった。そして、「文藝春秋」の他誌との差異化については次のように指摘している。「中央公論」「改造」という旧来型の総合雑誌でもなく、かといって、大衆向けの講談社系雑誌でもない雑誌。知識人読者としてのプライドを満足させ、同時に、大衆的読者から差別化を可能にしてくれる雑誌。そのような機能をはたすべく登場してきたのが(大衆的総合雑誌)としての「文藝春秋」に他ならなかった。

もちろん、こうした雑誌間の差異化にもっとも鋭敏であったのは当の「文藝春秋」を編集していた菊池寛であった。菊池寛は、雑誌が軌道にのりはじめた一九二五(大14)年一月号「文藝春秋」の「芸月録」で、次のように競合他誌との関係を扱っている。

「新潮」も「文芸春秋」「随筆」など、競争者が多いので、編集も楽ではないだらう。だが、「新潮」としては、あまりゴタゴタしないで、純文芸的な正道的な編輯をして貰ひたいものである。創作では、「改造」「中央公論」と対抗し、文芸記事では、「文芸春秋」「随筆」などと、競争しなければならぬのだから。

う背景もふまえておく必要がある。

四 批評・月評のマンネリ化と「創作合評」

「新潮」で「文芸時評」欄が開始される前年の一時期、一九二二(大10)年三〜九月の「新潮」には、すでに「現代作家に対する批判と要求」という、新作について語る時事的な作品評の欄が設けられていた。この記事の存在は、当時の他の新聞・雑誌において月評が隆盛していたことに呼応したものである。

大正十年の文学について解説した東郷克美は、「大正十年前後は文芸時評隆盛の時代である」とし、「読売新聞」「時事新報」といった新聞が「月評」を売り物にして競い合っていたと指摘している。曾根博義⁽¹⁴⁾は、大正十二年の文学を解説する中で、月評が大正十二年当時も賑わっていたが、毎月交代する既成作家や新進のブ口派作家・批評家らを取り上げる作品には偏りがあったり、作家や作品に密着した技術批評に傾いたりなどした結果、「どの新聞も誰かの時評を長々と載せるが、それがマンネリになって、作家に対しても読者に対してもほとんど力を持たなくなり、そのことに対する不満や批判も高まっていた」ために、その解決策として「一つは「新潮」の合評が「いま一つは「読売新聞」の芸術派と無産派による二人連評」が現れたと論じている。

「新潮」では、まずは他の新聞・雑誌での月評記事の開設に競合

するかたちで「文芸時評」を開始したといえる。だが、「月評」の是非について懐疑的であった。一九二二（大正）年一月号には、「文芸時評」欄を設けるにあたり、月評が作家にどう受け止められるかについての意見を求めるアンケート記事を掲載している。「最近になつて新聞雑誌に現はれる所謂「月評」と称せられる月次批評に就いて、その存廢の是非を論ずる事が漸く高くなつた。併し、未だ批評家や作家側からの纏つた意見は發表されてゐない」。そのため、「（一）月評に就いての感想（二）月評存在の可否」について問うたものである。こうした記事の存在を見ると、月評の記事としての適否の問題は大正十一年には明確に自覚されており、それに対する打開策として翌年の「創作合評」開始へとつながっているといえるだろう。一九二三（大正）年三月の「創作合評 第一回」冒頭では次のように記事開設の趣旨を説明している。

最近の文壇では批評不振の嘆声が高い。殊に月評の權威地に墜ちたりとなす人も多い。同人の見るところによれば、不幸にしてそれは真相を穿つた言のやうに思はれる。爰に於て、我が「新潮」は創作合評会を企て、文壇の諸家を招いて、毎月開催することになつた。本號に掲ぐるところは、即ち二月十二日上野大金に於て開いた第一回の報告である。元よりこれは漫談の形式には過ぎないけれども、今後何等かの意味に於いて批評壇振興の一助ともならば幸ひである。

月評スタイルの隆盛と沈滞を背景としていた点については、「創作合評」が開始された翌年一九二四（大正）年一月号「文藝春秋」の「文藝春秋」欄に次のような記事がある。プロ文学の隆盛に言及し、「昨年の文壇を回顧して見ると、よくよく平凡沈滞といふ外はない」と述べながら新潮合評会にふれている。

かうした文壇の沈滞を破らうとしてやつたことに、と云ふよりも文壇が沈滞した、めに新しい記事がないためにと云ふはるか、やつたものが新潮の合評会である。褒貶半し、近頃は貶の方が多いが、あれは今の文壇で云はば内閣である。徳田秋声老あたりを首相とし、中村武羅夫が伊藤已代治で、菊池寛が、よく攻撃される点で後藤新平で。菊池寛は「文芸春秋」と云ふ革新俱樂部を特つてゐるから犬養毅か。何をつまらないことを云ふのだ。

× × ×

従つて、文壇在野党の攻撃を受けるのは尤も千万である。前田河野の如きは、片上伸、吉江喬松、千葉龍雄などに内閣をゆずれと云つてゐるが、片上や吉江などの御談義を合評会で聞かされちや読者が助からない。とにかく吉江氏、片上氏、千葉氏ならそれに本間久雄氏前田河野自身などが加つて、早速「早稲田文学」あたりで文明批評とやらを盛にやればい、ぢやないか。何うして合評は「新潮」でなければいけないのだ。

同様のことは、同号の編集後記「記者便り」にも記されているが、加えて、「この合評会は一党一派に偏るものでなく、毎号各方面の作家評論家を招き、各自の言説を飽く迄尊重するつもりですから読み物としても興味あるは云ふ迄もなく、また批評壇の一大權威たるを信ずるものであります」と記している。「創作合評」の開始には、「月評の權威地に墜ち」た「批評不振」という状況認識を背景に、「各自の言説を飽く迄尊重」し、「漫談の形式」により「読み物としても興味ある」記事として構成しつつ、「批評壇の一大權威たるを信ずる」意図があつたことがわかる。すなわち、基本的には「月評」同様、最新の創作について、徳田秋声、菊池寛、久米正雄、久保田万太郎、そして芥川龍之介や宇野浩二、広津和郎など、既成作家たちの一定の見識あるやりとりそのものを楽しめる、雑文的な要素も持った「読み物」として構成され、かつ批評としての「權威」をもたせようとしたわけである。この記事に対する反響も、良くも悪くも、おおよそその意図通りであつたといえる。

一九〇九（明治）年頃から「新潮」の編集を中心となつて担つてきた中村武羅夫は談話筆記の名手で、「新潮」では談話筆記記事も多く掲載してきており、一九〇九年には匿名合評記事である、三人会「合評記」もあつた。そうした流れから見ると、合評を（座談会）形式で記事にすることもそれほど奇抜な発想ではなかつたであろうと思われ。

「文壇の沈滞を破らうとして」もしくは「文壇が沈滞した、めに」 「新潮の合評会」がはじまつたとされる。そして、「新潮合評会」は震災直後に組閣された山本権兵衛「内閣」に、それへの「攻撃」をする例が「在野党」に擬されている。菊池寛が復興の中心的な役割を担つた内務大臣「後藤新平」もしくは通信大臣で護憲派の「犬養毅」になぞらえられているのは、この二人が普選推進派であつたことにも掛けていたであろうか。文壇内の多様な月評と雑文の氾濫による混乱、「文壇内大衆化」に対して、震災復興内閣と呼ばれた山本内閣になぞらえることで、權威をもって作品評価をし文壇の混乱に処する役割と、普選推進になぞらえて新旧・党派が勃興する文壇内大衆化を統合する役割をこの合評が負っていると見做している。こうした見立てでは、この時代の機運をよく表現しているであろう。

一九二六（大正）年末からの円本ブームが大衆読者を顕在化させたことはよく知られている。永峰重敏は、従来「円タク」とともに語られてきた円本だが、円本の宣伝文句にはしばしば普選のアナロジイが使われたことを指摘している¹⁰。先の記事はこれより早い時期のものだが、この時代の大衆化の動向などの時勢と（座談会）という言説様式がこの時期に現れたこととの関係の深さをうかがわせる。「權威」をもたせることについては、発言者の表記とも関わる。（座談会）形式の合評としては「新潮」に先だつて、一九二二（大正）年十一月号から「人間」で「人間合評」が連載されていた。最

初に連名で「小山内薫、久保田万太郎、中戸川吉二、吉井勇、久米正雄、里見淳」らの名が記されているが、個々の発言箇所は「ABC」で記されている。この表記については、末尾に「附言」があり、「話し手をABCで現はしたのを、卑怯だとのお咎めもあるかもしれないが、初めに連名もあつて、分る人には言葉つきでも分る筈だし、分らない人には、記名したつて言葉のかけひななんぞは汲めさし草」以来、こうした匿名表記はめずらしくない。が、逆に発言者名が明示されていた例も存在していた。こうした匿名と記名の二つが揺れ動いていた従来の様式に対して、「新潮」における合評記事は最初から積極的に発言者名を顕示し「各自の言説を飽く迄尊重」しつつ、玄人批評家による「権威」を前面に押し立てて記事を構成した。

一方、合評は「漫談の形式」なるがゆえの馴れ合いがしばしば指摘された。近藤経一「合評に就て」(『文藝春秋』一九二三・六)は、批評は「たとへそこに多少の間違ひや、偏見や独断や、があつたとしても、その第一の、そして最要の条件として絶対に妥協と情実とから自由でなければならぬ」が、「人間である以上、二人以上の人間が集つて各自をのべ合ふ場合、そこに妥協と情実とを絶対に存在せしめないといふことは不可能なことだ」と難じる。だが、「現在の日本の文壇には、その妥協と情実とに濁つた合評、その合評と

いふものにさへ優る様な批評を書く一人の批評家もみない」から合評が流行るのは仕方がないと述べている。

また、川端康成は「最近の批評と創作——月評の後に——」(『新潮』一九三三・八)で、次のように合評を新たな月評の形式として評価しつつ、その「権威」がもたらす「害毒」を指摘していた。

兎に角、月評には権威がないと云ふことが、概念として信じられてゐる。そして、これを救ふために、「新潮」の創作合評会が始められた。時宜を得たことは云ふまでもないし、勿論批評界に非常にいい刺激を興へた。ために広く月評界に活気が加つて来たやうでもある。集まる人々の顔触れから一種の事大思想で合評の言論が、早くも権威を持つものとして、注視を集め信頼されるやうな傾向も見えて来た。信用していい点多々あるけれども、従来の月評に権威がないと云ふことが、概念的に信じられてゐたやうに、合評には権威があると云ふことが、概念的に信じられるやうになることは、非常に危険である。このことに就て、片岡良一氏が「文芸春秋」の七月号に書いてゐる「新潮の合評会に就いて」は実に卓説であると思ふ。少くとも、吾々「現文壇の青年」は、合評会から恩恵と同時に害毒を受けることを覚悟しなければならぬ。

ここに言及されている片岡良一の一文は「新潮合評会に就て」(『文藝春秋』一九二三・七)で、合評には作品に対する玄人意識によ

る技巧の分析や長所短所の解剖はあつても、当今の作品群に「動いている氣運」や「文壇が激んで動かないとすれば、なぜに動かないかを深く探る」といった積極的な働きかけが欠けていると指摘したものである。新感覺派と呼ばれることとなる新しい氣運を生み出す「現文壇の青年」の側にあつた川端にしてみれば、新しい氣運に対して消極的な見方をする既成作家らの合評を牽制する意味もあつただらう。

雑文とも近接する「漫談の形式」ゆえに、評者の個性が多様に表れる合評が面白みをもつて迎えられるとともに、発言がいい加減に流れ、しかもそれが「権威」をもつことの弊害は他の論者によつても指摘された。(堀木克三「合評会の弊害」『文芸春秋』一九二五・三など)。合評会の是非は、当の合評会でも話題となつた(『創作合評』第七回「一九二三・十、新潮合評会 第十九回」一九二四・十二)。

五 座談形式の言説様式の波及と新潮合評会の変質

そうした批判がありながらも、新潮合評会が継続し、こうした形式が流行したこともまた事実である。この記事が「新潮」の目玉記事の一つとして定着したのは、やはりそこに面白みがあつたからで、「新潮」に追隨するかたちで多くの雑誌でも合評会形式の記事が開設された。一九二三(大12)年五月号「文芸春秋」の「文芸春秋」欄はその様子を次のように記している。

合評会大流行である。プロレ的文学者など云ふ連中は、既成文壇を貶しながら、やつて居ることは、皆既成文壇の模倣であり、真似である。「人間」が合評をやり、「新潮」がやつて以来、イブセン会合評、早稲田文学合評、「都」に出る戯曲合評会、「文学世界」の合評など、氣恥しくもなく、よく人真似をやる。「新潮」で「創作合評」が開始された一九二三(大12)年には、ここにあげられている以外にも、「婦女界」「女性改造」に、すぐに(座談会)形式の記事が波及する。そこでのテーマは、たとえば、「婦女界批判会(速記録 第二回)」「通経其の他の売薬に対する批判(二)」「新聞雑誌に医学的記事を掲載するの可否」(『婦女界』一九二三・六)、「女性改造談話会 現代婦人と信仰に就いて女性より男性への要求」(『女性改造』一九二三・八)といったやうに、文学作品の時評ではなく、女性にかかわる一般的な関心事をテーマとしたものである。ここに、「文芸春秋」に先だつ「座談会」記事スタイルの原型を認めることができる。

「新潮合評会」においても、取り上げられるテーマが次第に変化して行く。一九二六(大15)年七月の第三十六回新潮合評会は「社会思想家と文芸家の会談記」と題して、「社会問題に就いていろいろ考へてゐられる方々が現代の文芸なり、作家生活なりに就てどういふ考を持つてゐられるか」をテーマにした内容である。そして、翌一九二七(昭2)年七月以降、それまでのように一作ずつ新作をと

りあげて合評する創作評は激減する。

この変化は同年三月から「文藝春秋」で「座談会」記事の連載がはじまっていた時期と重なる。「文藝春秋」の「座談会」は、開始当初はゲストに話を聞く形の記事であった。一九二七(昭二)年三月の第一回は「徳富蘇峰氏座談会」、第二回は「後藤新平子座談会」等、十月の「高橋是清座談会」まではゲスト名が冠されている。それが、九月に「現代医学座談会」、十一月に「海軍座談会」「野球座談会」など、ゲストが複数になるとともに、社会問題をテーマとした座談会に定着していく。

「新潮合評会」も、一九二七(昭二)年九月の第五十回「芥川龍之介氏の追憶座談会」ではじめて「座談会」の文字が表題に用いられたあたりから、「文藝春秋」の座談会記事を倣うように、十月の第五十一回「徳田秋声氏との恋愛芸術問答」等、第五十三回まで、嵯崎勤の司会でゲストを囲んだ座談記事がある。一九二八(昭三)年一月の第五十四回「モダン生活漫談会」以降、文壇時事問題、文学の新傾向から社会問題等までをテーマとした内容に変化する。「新潮合評会」の名称は一九三一(昭六)年四月の第九十二回まで継続するが、連載開始当初のような創作評は年に一回程度となる。その後も座談会記事としては継続するが、「合評会」の文字は消える。一九二七(昭二)年から当初の創作合評からは変質しはじめ、一九三一(昭六)年にはテーマを文学に限定しなくなるのである。

話者」にとって「談話の内容は、決して頭を原稿に痛める程の重荷なしに、容易に安々と、しかも何の形式なしに声に表せばよ」く、しかも、「とても原稿紙に書いては、纏める事も出来ぬ様な断片的な、些細の事柄も容易に、商的取引の対象と成り得る」とする。第三に、「読者側」から見れば、「談笑の間に交した言葉」で、「軽いむしろ爽やかな興味を以て読む事も出来る記事であり、「しかも、断片的な知識が、陸続と群れをなして襲つて来る」もので、「長い思惟(こんなものは、むしろ影を消せば好い位に思つてゐるだらうが)の存在を許さぬ程、知識は豊富に簡単であり、加えて「一読容易に、各層の階級人の、思惟、状況を、或ひは興味津津たる、経験談を、容易にその雰囲気、目前に浮べながら、読了し得る」、「要するに面白い」記事である。

六 モダンイズムの言説様式としての合評・座談会

このように見ると、〈座談会〉を「モダン」といふ言葉が、一体に、人の口の端に上つて来た時代¹⁾の一言説様式として把える視角が開けてくる。〈合評〉としての〈座談会〉形式の記事は、明治以来その形式としては存在していた。しかし、それは未だ劇評を中心とした限定的な対象についての合評であるにとまっていた。明治末以降小説が中心的なジャンルに成長する。一九二二(大10)年前後から文壇交友録小説・モデル小説・私小説といった小説が隆盛

一九二七(昭二)年からの「新潮」と「文藝春秋」における述べたような変質については、「文藝春秋」の編集をしていた菅忠雄が「座談会と合評会」(総合チャリナリズム講座 第六巻 内外社 一九三二・三)で次のように述べている。「文藝春秋」ではじまった座談会は、当初一人のゲストとの対談記事であったが、一九二七(昭二)年九月以降、テーマをめぐる座談といった趣向に変化することを指摘しながら、座談会記事が流行した背景と三つの根拠をあげて説明している。

昭和二年と云へば、ラデオ網が、全国を押し包む勢ひで放送局が出来上り、労働党の確立も見て、プロレタリア文学が再燃の状態にあつて、円本の洪水が、今や全日本を、押し流さうとするかに見えた頃である。又、外からは、アメリカの尖端的生活媚態が、この国の上下の人々を酔ひ潰さうと、し始めた時分である。時代は、急テンポで、忙しさを増して、毎日の話題が、目まぐるしい様に廻転して、絶えず変化が支配して行かうとする有様だつた。モダンといふ言葉が、一体に、人の口の端に上つて来た時代だ。編輯の態度は、当然変らねばならない。

こうした背景において、編輯者・談話者・読者にとって魅力となつた三つの根拠を述べている。第一に、「編輯者側における、経済的根拠」として「廉価に仕入れて、相当の値段で、手広く売る」「産業資本主義の原則」¹⁾にかなつた記事である。第二に、参加する「談

し、読者の投稿記事が文芸誌から減退するとともに、文壇人の雑文が増大して、言説上の世界(メディア世界)が自立化の傾向をみせはじめ。労働者やサラリーマンといった都市中間層が社会を構成する社会層として顕在化し、雑誌メディアの活況と競合を背景に、それに促され、一九二三(大12)年以降、「文藝春秋」「随筆」「不同調」といった雑誌に見られる、交友録やゴシップ、短文のエッセイを中心とした雑誌の発行によって雑駁な散文の氾濫が生じ、雑誌間の競合が激しくなる。「新潮」の「創作合評」が開始されるのは、そうした雑駁な言説の氾濫とも、「中央公論」や「改造」などの論説・評論とも差異化する雑誌間競合状況のなかにおいてであった。当時の言説のモードたる月評としての性格をもたせつつ、「漫談の形式」によって会話の活劇として見せ物的なスタイルで提示しながら、それを既成作家によって行うことで権威をもたせて、一つの言説様式となつた。プロレタリア文学と芸術派の対立をはじめ多様な文学観が相克し、文学と社会に関わる雑駁な言説が渦巻くなかで、〈座談会〉は、広義のモダンイズムの趨勢に見合った大衆化時代におけるメディアの言説様式の一つとして定着普及したといえるだろう。

〈座談会〉は、限られた少数の論者たちによる親和的な空間での気軽な対話を基調とするともに、今の話題が問いとして立てられ、共有された関心や問いの地平が開示される場である。確かに、

短い会話の言葉のなかでは参加者個々の見解は断片的になりがちである。だが、対立も含んだ複眼的な意見の交換や雑駁な話がそのままに提示され、あるいは同意される会話が提示されることで、ゆるやかに各の主観の交差が提示されつつ客観化される。結果として、社会的な関心の地平をメディア上に顕在化させる装置として機能した。(座談会)が大正末以降に定着普及したのは、ゴシップ的な私的な領域に近い言説の氾濫と、相対的に自立化した公的言説領域との間の奥行き偏差を柔軟に表象し、その両面を取り込みながら、文学やそれを取り囲む文壇、題材としての社会やメディアについての関心を統合化して提示することの必要性に促されたためであったと考えられる。

こうした時代の要請との合致が基盤となつて、(合評)から(座談会)への展開を促し、次第に公共的な言説の上演の場としての機能をもちはじめたのではないか。「文藝春秋」で座談会が成立するにいたる過程は、関心の対象が多様化し、文学から社会一般へと対象領域を拡大する方向で、合評会から座談会へと発展した。それは、多様な今の話題が交錯することで大衆の社会的な関心と認識が形成される場として機能するようになる過程であったといえる。

(注)
(1) 従来の「座談会」の発生的な概略については、和田芳恵「座談会」

(日本近代文学館編「日本近代文学大事典」講談社。また、酒井直樹、P・A・ボベ、F・ジェイムソン、H・ハルトウニアン、テツオ・ナジタ、マサオ・ミヨシ「文化の政治性 フォーラム 92 [ZADANKAI] という形式」(「世界」一九九二・七)、マサオ・ミヨシ「オフ・センター 日米摩擦の権力・文化構造」(佐藤秀樹訳 平凡社 一九九六・三)「第九章 座談会と会議—言説形態」では、「座談会」が日本の言論の場で盛行してきたことを批判的に検討している。

(2) 中野三敏「江戸名物評判記案内」(岩波新書 一九八五・九)
(3) 日高昭二「座談会について」(座談の愉しみ 下) 岩波書店/二〇〇〇・十二

(4) 「文芸の社会化」が浸透した様相をここで詳細に論じることはできないが、一九二〇(天)年には諸々の社会的事件や社会主義運動の活発化に触発されて「文芸の社会化」が盛んに論議された(松村友規「解説一九二〇(大正九)年の文学」『大正文学全集 第九巻 大正九年』ゆまに書房 二〇〇一・十二)。一九二九(昭)年九月で三〇〇号となった「新潮」は、十六人の記事を集めた「文芸雑誌の過去・現在・未来に就て」を掲載している。それらの中で目につくのが、プロレタリア文学派に限らず、文芸(雑誌)の「未来」は、「文学の領域を社会生活の全般にまでひろめて、しかもそれを大きく包括すると云つた傾向のものとなる」(浅原六朗)といった見方である。

(5) 井上ひさし・小森陽一編「座談会昭和文学史二」(集英社 二〇〇三・九)の「第五章 横光利一と川端康成(川端香里里・保昌正夫・井上ひさし・小森陽一)で、小森陽一は「私は、「プロレタリア文学」と「モダニズム文学」を単純に対立させて考えることは誤りだと考えます。両者は、「モダニズム」という大きな世界的同時性の中であらわれた、時代状況を共有する文学的動向だった」という見方を述べている。保昌も「プロレタリア

文学」と「モダニズム文学」両者にあつたのは「既成文学」への対抗意識です」と述べている。

(6) 田山花袋「文章世界」の巻尾に「(文章世界 一九二〇・十二)

(7) 浦西和彦「同人雑誌の時代」(講座昭和文学史 第一巻 都市と記号 昭和初年代の文学)有精堂 一九八八・二

(8) 「編集後記」(文芸春秋 一九二五・六)には次のような記事がある。ここに「編集後記」は「文壇人」「準文壇人」のサロンの性格を編集上の方針としてはっきりと持っていた。

△雑文五十篇必要なので、これを文壇の士丈に求めることは、少しムリである。百人の文壇人に二月目毎に書いて貰はねばならなくなる。だから、顔触れに変化を求めたため、今後は準文壇人にも頼む筈である。

(9) 生田長江は「一般群衆と文壇的群衆」(新潮 一九二五・九)で、この時期文芸誌に「書く人」が多く現れた状況を、文芸誌読者としての「一般群衆」に対して、「専門家顔をしたたり、玄人ぶつて見せたり」「相競うて文壇の楽屋のゴシップの知識をふり廻しさへもする」「文壇的群衆」と名づけて痛烈に批判している。

(10) 浜崎廣「雑誌の死に方」生き物としての雑誌、その生態学(出版ニュース社 一九九八・三)

(11) 永峰重敏「モダン都市の読書空間」(日本エディターズスクール出版部 二〇〇一・三)「第二章 初期『文芸春秋』の読者層」

(12) この点に関しては、「文芸春秋」(文芸春秋 一九二五・十)に次のような記事がある。

数年前は、創作万能の世の中であつた。今や、その反動として、雑文全盛の親がある。雑感想、雑批評ともに、小名を成すに手頃である。雑文士の蠢動する所以である。

創作、それは三年先の鳥にきけ、俺達の知つたことでない!

x

文壇に志を持つからは、せめては相当の創作を以て世に出ようと云ふ殊勝な志も、かう文壇が雑然としては、じつとしてはあられないのは当然であらう。とにかくも、発言をといかに同人組織の安雑誌の排出することぞ。雑文士一山百文、いままに本屋の店先にあらう。これも、「文芸春秋」の悪影響あらば、また何をか云はん。

(13) 東郷克美「解説 一九二二(大正七)年の文学」(大正文学全集 第十巻 大正十年)ゆまに書房 二〇〇二・三

(14) 曾根博義「解説 一九二三(大正十二)年の文学」(大正文学全集 第十巻 大正十二年)ゆまに書房 二〇〇二・七

(15) 河盛好蔵・野口富士男・大久保房男「1000号を迎える雑誌「新潮」」(波 一九八八・四)に次のような発言がある。

河盛 新潮社と文壇との間の太いパイプになつて来たのは中村武羅夫で、戦前の「新潮」は中村さんの雑誌と言つてもよかつたでしょう。初期の「新潮」の記事は中村さんの作家訪問で埋めていたようなものではないませんか。

野口 談話筆記の名手でした。独歩が亡くなったときに、四十七人の作家の談話筆記二百枚か三百枚を二十日間でまとめた。

大久保 書くのが速かつたんでしょうね。

野口の発言にある国木田独歩の特集号は、一九〇八(明41)年7月号「新潮」を指し、これを中村武羅夫がほとんど独力でまとめたことについては、百目鬼恭三郎「新潮九十年小史」(新潮社 一九八六・十)にもある。

(16) 永峰重敏「円本ブームと読者」(近代日本文化論? 大衆文化とマスメディア) 岩波書店 一九九・十一

(17) 「新潮」で合評記事が始まった当初、久米正雄は「合評」(文芸春秋 一九二四・三)で次のように述べている。

合評と云ふものが、文壇に何時から初まつたか、私は知らない。が、誰かの説に依ると、森先生のしがらみ草紙だか、めざまし草だか以来だと云ふから、兎も角も古くからあつたジャーナリズムの一形式だ。近く新演芸の合評が、随分永い間続いてゐるが、文壇が目を付け出したのは、人間合評が初めだ。早稲田文学なども可なり前からやつて居たものだが、最近新潮が企てるに及んで、謂はゞ流行の頂点に達したとも、完成したとも云へる。殊に新潮を学んで婦女界が批判会を起すや、婦人雑誌方面へも飛火して、女性改造談話会等其他、今や合評全盛の觀がある。賑かな事此位賑かなものはないから、一面非常に景氣はいいが、一面又眉を蹙めさせる点もある訳だらう。

お蔭で私などは、人間合評以来の経験者なせいとか、何時の間にか合評

業者と云つてもいい、位に、引つ取り出される事になつた。事実収入の点から云つても、婦女界から七十五円。——それも震災前は百円だつたものを、それでは余り多過ぎると云ふので、合評者の方から遠慮した。

——新潮から三十円、結局月百円余の月収がある訳だから。

※本稿は、日本学術振興会二〇〇三—二〇〇五年度科学研究費補助金（基盤研究C）を受けた共同研究「近代日本における〈座談会〉の成立過程についての動態的・総合研究——雑誌メディアにおける基礎的調査を中心に——」（研究代表者 佐藤伸宏）の成果である。

——やまざき・よしみつ／大阪府立工業高等専門学校——